平成30年度 第2回
北海道立総合博物館協議会

議事録

日時：平成31年3月27日（水） 13時30分開会

場所：北海道博物館 講堂

《意見 5 「構想」におけるコンセプト・理念の不在について（2）》	10
《意見 6 アイヌ民族との関わりと歴史観について（2）》	11
《意見 7 博物館と公園地域全体との関係性について》	12
《意見 8 「構想」策定に至る過程について》	12
《意見 9 「構想」におけるコンセプト・理念の不在について（3）》	13
《意見 10 博物館施設の活用について》	14
（4）報告事項 4 平成 31 年度 北海道立総合博物館協議会 スケジュール	14
4 その他	14
5 閉会	14

1 開会

右代学芸主幹：それでは定刻になりましたので、ただ今から平成30年度第2回北海道立総合博物館協議会を開催いたします。開催にあたりまして北海道博物館 石森館長よりご挨拶を申し上げます。

2 館長あいさつ

石森館長：皆様、大変お忙しい中、協議会のためにご参集を賜りまして本当にありがとうございます。北海道博物館も開設されて、丸4年でございます。本日は、今年度の実績報告と来年度の計画ならびに道で様々に検討しております、「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」等につきまして、皆様方にご審議をお願いしたいと思っております。

本日は本庁から、文化振興課の高見課長、そしてアイヌ政策課の栗原主幹にもお越しただいております。ただ誠に申し訳ございませんが、アイヌ民族文化担当の中村副館長は、本庁で別件の会議に出席しておりますので、その点、ご容赦いただければと思います。限られた時間ではございますけれども、何卒よろしく、ご審議のほどお願い申し上げます。本日は、本当にありがとうございます。

《資料確認》

右代学芸主幹：配付資料を確認させていただきます。お手元の資料をご覧ください。

〈以下、配布資料について確認〉

《出席状況確認》

右代学芸主幹：出席状況を確認させていただきます。今回は湯浅委員が欠席となっております。委員総数7名のうち6名の委員が出席されております。北海道立総合博物館条例第25条第2項の規定を満たしていることを報告させていただきます。

《出席者紹介》

右代学芸主幹：本日の会議は、今年度第2回目の会議ですので、協議会委員及び博物館事務局の紹介は省略させていただき、環境生活部からの出席者をご紹介します。環境生活部文化局文化振興課の高見課長でございます。

高見課長：高見でございます。よろしくお願いたします。

右代学芸主幹：環境生活部アイヌ政策推進局アイヌ政策課の栗原主幹でございます。

栗原主幹：栗原でございます。よろしくお願いたします。

《会議の公開について》

右代学芸主幹：本日の協議会は、道の情報公開条例の規定により、公開とさせていただきます。それでは、この後の議事進行は、大原会長にお願いします。

《会長あいさつ》

大原会長：大原でございます。開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。今日の議題は今年度の事業報告と来年度の計画で、経常的な博物館活動を協議会として拝見させていただくということです。それからもうひとつは、北海道博物館周辺の野幌森林公園内の長期的な意味での、いろいろな意見を拝見させていただくということです。どちらも北海道博物館にとっては、短期・長期にわたっての重要な議題と思われまますので、活発なご議論をお願いいたします。議事の円滑な進行についてのご協力も、よろしくお願い申し上げます。簡単ですけれども、ご挨拶にさせていただきます。

3 議題

大原会長：本日の主な議題はお手元の次第にありますように、平成30年度の実績報告と、平成31年度の年度計画。それから「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」です。協議会の終了時間は概ね15時30分を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。それでは早速、議事に入らせていただきます。

議題（1）報告事項1 平成30年度北海道博物館事業実績報告

議題（2）報告事項2 平成31年度北海道博物館年度計画

大原会長：報告事項1「平成30年度北海道博物館事業実績報告」、報告事項2「平成31年度北海道博物館年度計画」です。一括して事務局から説明をお願いいたします。質疑応答については、最後にまとめて行います。それではお願いいたします。

右代学芸主幹：平成30年度北海道博物館事業実績報告につきましては、舟山学芸部長、川田総務部長、小川アイヌ民族文化研究センター長より、それぞれ報告させていただきます。

〈以下、配布資料1・2に基づいて、舟山学芸部長、川田総務部長、小川アイヌ民族文化研究センター長より説明〉

《意見1》事業実績・年度計画の全体について（1）

右代学芸主幹：本日は湯浅委員が欠席ですが、湯浅委員からは、この報告事項1・2について、事前にメールでコメントを頂戴しておりますので、読みあげさせていただきます。

「1年間、皆様が博物館活動のあらゆる局面に尽力され、新たな取り組みもなされたご様子が報告書から伺え、敬意を表します。たとえば、図書室支援員制度や、調査研究・展示に市民を巻き込む取り組みは、参加者の意欲を継続させるために館側の丁寧なマネジメントが不可欠であり、学芸員の方々だけでなく事務職員の方々と連携して今後も発展されることを願っております。個々の案件についての意見は控えますが、今年度は台風・地震に見舞われ、その対応において北海道博物館が果たした役割・果たすべき役割が明確に

なったと思います。課題についても認識されていて、その対策・継続した対応が適切に明示されていると考えます。来年度の計画も適切であると考えます」

ということです。その他、事業実施報告の表記についての指摘がありましたが、これは事務局で検討させていただき、さらに良いものを目指していきたいと思いますので、ここでは省略させていただきます。以上です。

大原会長: ありがとうございます。今年度の実績報告、そして来年度の計画につきまして、皆様からのご意見や質問をお願いいたします。

《意見2》事業実績・年度計画の全体について（2）

宇佐美委員: 総体的な印象と感想と要望です。今年度、みなさんが一生懸命やってこられて、努力されたことが実績報告書でもよくわかりますし、新年度の年度計画にも表れていると思います。この4年間、ずっと内部評価・外部評価をやってきましたが、「何のためにこれをやるか」と言えば、次のステップを目指して、「ホップ・ステップ」に役立てるためだと思っていますので、評価そのものについては、細かいことを申し上げるつもりはありません。

けれども、「ホップ・ステップ」と言いましたけれども、新年度の年度計画については、せっかく新しい若い職員も入ったようですので、もう少しワクワクドキドキするような、未来志向的な表現も欲しいと思っていました。毎度話題になりますけれども、たとえば、数値目標は無難な数字になっています。入館者数もそうですし、満足度調査が今年度実績で90%以上を達しているのに、来年度の目標値がなぜ80%なのでしょう。目標はもう少しパワーアップするような内容や数値である必要があると思いますが、いかがでしょうか。

今日は大相撲の貴景勝関が大関になりました。大関になった途端に「横綱を目指す」と言っております。それと同じことを言うつもりはございませんが、やはりもう少し上を目指して、新しく入ってきた若い職員も将来に向けて頑張れるような計画であってほしいです。これは要望です。

《意見3》道民参加型組織について（1）

宇佐美委員: 毎回この協議会で、道民参加型組織の話はずっと言っています。今年度は、一部、図書室支援員という形になったようで、そして「新年度はいよいよやるぞ」ということですけれども、もう少しスピードアップしてください。そして、新年度は、第1期中期計画の最終年で、総括の年ですので、今の時点でも、道民参加型組織のあり方をもう少し明確な形で欲しかったです。あと1年しかありませんけれども、ぜひとも新年度には、道民参加型組織のパワーアップと明確化をやっていただきたいです。

《意見4》博物館連携について（1）

佐々木委員: 昨年度の実績につきまして、評価すべき点を述べておきます。ひとつは、先ほどの湯浅委員のご指摘にもありましたけれども、昨年の台風21号と北海道胆振東部地震の

際のご対応です。私もずっと状況を見てきたのですが、北海道博物館が北海道博物館協会を通じて、非常に迅速に情報収集をされました。そして厚真町などの非常に被害が大きかったところに対して、迅速な援助を差し伸べたということで、非常に感服しております。

国立アイヌ民族博物館も、こういった災害の際に、いずれは東京以北の博物館のレスキュー活動の拠点として、他の国立博物館からも期待されているところがありまして、勉強になるところも多いかと思えます。非常に迅速な、素晴らしい仕事をされていますから、この項目の評価は「A」ではなくて、「S」でも良かったかと内心思っております。

それから、国立科学博物館との協力による、博物館学の研修も非常に良い活動をされています。3月初めに、東京文化財研究所での「これからの博物館制度の在るべき姿～博物館法見直しの方向性をさぐる～」というシンポジウムに参加してきたのですが、そこで国立科学博物館の方が、これからの同館の活動のあり方ということで、地方の博物館との連携に非常に力を入れたいと話しておられまして、今回の北海道博物館協会と協力した研修活動は、その良い事例としてあげておられましたので、これも高く評価されていると思います。

《意見5》博物館連携について（2）

佐々木委員：気になるところは、博物館の連携や広報に関するところですね。資料1の10ページ目に、白老のアイヌ民族博物館の閉館にともなう、学校団体利用の伸びの問題がありますけれども、この状況を見ると、「白老と札幌は直接相関関係にはない」ことが若干わかります。ただ来年4月から国立アイヌ民族博物館がオープンすることによって、修学旅行客の奪い合いになってしまっただけでは駄目ですから、国立アイヌ民族博物館は、年間来場者100万人という目標を掲げて、それに対して努力しておりますけれども、その100万人が、白老だけではなくて札幌にも来て、北海道博物館への修学旅行客も増えていく形になっていくことが望ましいと考えております。我々国立アイヌ民族博物館も具体的にどうしなければいけないという案はないのですけれども、今後は協力して情報交換などをしていければと思います。そのときはよろしく願いいたします。

《質疑応答1》道民参加型組織について（2）

児島委員：全体的なことを最後にご質問させていただきますが、その前提として、入館者の滞在時間はどのぐらいでしょうか。データは配布資料のどこかに記載があるでしょうか。それから、外国人来館者の数字はわかるのですけれども、道外の学校の数や、道外からの来館者の数はどこかに記載があるでしょうか。それから、この博物館にいらした方たちが、開拓の村にも行ったのかという関連性の数値を伺いたいと思いました。

なぜかと言いますと、各委員が仰ったように、道民参加型の問題です。道民と協働する博物館ということが、道立の博物館としての基本となっていて、道民がこれから博物館展示や利用に関わっていくということですので、道民が自分たちが楽しむために展示などを

作り上げていくことと、道外あるいは国外からの多くの来館者を呼び込むことが、どのようにつながっているのかということがわかりません。別々のことでしょうか。展示は、道民用の空間や展示があるわけではなくて、ひとつだと思えますので、その辺りがどのようになっているのかという関係をご説明いただけるでしょうか。つまり、その全体像がどのようになっているかということです。

舟山学芸部長：まず入館者の滞在時間でございますが、具体的に数値を取ってはございません。ただ2年前の『北海道博物館研究紀要』の中に、オーディエンスリサーチという形で、それぞれの展示コーナーの滞在時間の調査をまとめた報告がございます。その1件だけでございまして、継続的に入館者の滞在時間を計っている状況ではございません。

次に、道外からの入館者ですが、資料1の23ページに当たりますが、仰るとおり全体の入館者数と外国人入館者だけで、道内・道外を区分した数値は押さえておりません。ただ参考になる数値としましては、各企画テーマ展におけるアンケート調査では居住地を記入していただいております。たとえば、第8回企画テーマ展の際には、札幌市内からいらした方が120名、江別の方が32名、北広島が0名、恵庭が3名、千歳1名、石狩1名、その他道内28名、道外10名、国外4名です。

学校団体について補足いたしますと、台風21号・胆振東部地震の影響等も今年度はございました。4月から8月にかけては、団体も含めて入館者数は比較的順調に伸びておりました。ただし、地震の影響で、道外の学校の来館は中止になってしまい、1月までの数字で見ると若干落ち込みがございました。その後はまた揺り戻しがありまして、3月現在の数字では昨年度の実績より上回っている状況です。海外からのお客様につきましても、台風・地震の影響により1月末までの数字では、総合展示利用者全体に占める外国人利用者の割合は減少しましたがけれども、その揺り戻しがあり、2月以降は例年よりも多いお客様に来館いただきまして、3月末現在、総合展示利用者に占める外国人利用者の割合は前年度並みの5.4%に戻ったという状況です。

それから道外の学校につきましては、昨年度から、特に修学旅行生の誘致活動を、関東圏から始めまして、東北圏、今年度は関西圏、四国、と地域を増やして実施しています。直接団体利用者数の上昇には至りませんでしたけれども、成果は徐々に表れていると考えております。

最後に、道内外のお客様による博物館利用ですけれども、基本的に道内の方には、自分たちの自然・歴史・文化をよく知っていただくという基本設計でいます。そして道外からのお客様については、本州とは違う北海道の自然・歴史・文化をよく知っていただくというコンセプトで作っております。

大原会長：博物館入館者と開拓の村との関連性は、いかがですか。

小川学芸副館長：本来は博物館でも数字を押さえていなければいけないのですが、指定管理者から月次のレポートをいただいております。そちらの方で「共通チケット」という、開拓の村と博物館の両方に入場できる券の販売枚数がわかっていますので、両方に入館され

たお客様については、そちらで数字を押さえていることになります。

《質疑応答2》道民参加型組織について（3）

児島委員：同じ道民参加型組織について、アイヌ民族文化研究センターですけれども、内部評価で「B」となっている内部評価の項目4・5の、資料の整理・登録につきまして、こういうことは道民参加型ではできないのでしょうか。

小川センター長：確かに私どもで検討しているときにも、博物館の仕事を進めていくときには、図書室支援員もそうですし、資料をどういった形で整理して活用していくかということでも、いろいろな方に参画いただくことが有益かと考えております。ただ、アイヌ文化に関する資料については、児島先生もよくご存じかと思いますが、かなりデリケートなプライバシー情報を含んでいる資料がありますので、そういった資料の整理に、どのような形で外部の方に関わっていただくかについては、館の内部でも少し慎重な意見があります。その辺りを意識しながら、どのようなあり方が良いかを考えているところです。

《質疑応答3》博物館の連携について（3）

大原会長：北海道の中核的博物館という位置付けはいろいろなところに出てきたと思いますが、北海道は非常に広く、九州よりも広いところですから、「中核」と言ったときに、釧路や帯広から来るのはなかなか大変だと思うので、もしかしたら地方と北海道博物館との間にハブみたいな組織がないと、本当の中核的な役割はできないのでは、と思いましたが、その辺りはどのように考えているのでしょうか。何かすでにされていることがあればお教えいただきたいです。

舟山学芸部長：中核的な役割を果たさなければいけないというのは命題ですけれども、なかなか実態にはなっていないと感じています。基本的には当館はこれまで説明いたしましたように、北海道博物館協会事務局という立場を活用して、積極的に関わってきましたが、道博協にはハブ的な組織としての下部組織がございます。

北海道博物館協会は、道内6地区のブロックと、学芸職員部会、美術館、動物園・水族館、科学館という4つの種別の下部組織で構成されています。地区ブロック・下部組織の事務局となる館園を中心に、それぞれの地区ブロックや館種別の組織でネットワークを組んでおります。道博協では、全道的な活動も、そうした下部組織を基盤としているのが実態です。特に、今年度実施しました国立科学博物館との連携事業でも、このような下部組織と連携した研修会を実施しております。

大原会長：要望になりますが、「道民参加型」と言っても、この建物で道民参加型をやると、江別・札幌市民の参加型になってしまうと思います。そうすると、北海道としては、旭川・帯広・函館・釧路のような、もうひとつの「ハブ中核」のようなレベルのものがあってもいいと思います。その辺りのほうが、むしろ地方に近いと思うのです。災害があったときのレスキュー体制も、すべてを野幌の北海道博物館に運んでくるのではなくて、ハブ中核館に拠

点を置いてもいいかと思えます。そうすると、道としてはハブにあたる中間のところをもう少し育てることを、ぜひ考えていただければと思います。

《意見6》事業実績・年度計画の全体について（3）

竹垣委員：この協議会では3年間、いろいろな話を言い続けてきましたが、主には、「実績に対する客観性の欠如」であり、「未達に対する追及の甘さ」であり、「目標に対する蓋然性の無さ」であり、そういうことを、私は3年間、言い続けてきた気がします。

結局、それは、北海道立総合博物館条例と北海道博物館基本的運営方針との整合性がなかなか取れていないことや、その結果である第1期中期目標・計画が体系的に作りえなかったことや、それが個人・組織の目標とリンクできていなかったことが要因だと思っています。

これから、次の中期目標・計画を作成すると思います。今できていないことが明らかになっていると思いますので、そういう基本的運営方針との整合性を図り、館としての中期的な目標・計画を体系的に作ることで、最終的に個人個人の目標にリンクしていくことをぜひお願いしたいです。

協議会委員を何年間かやって、チェーンストアと博物館は似ていると思うことがよくあります。特に、一番似ているのは、「結局、個人個人の資質に関わって来るのだろう」ということです。ですから、まずは個人個人が、「5か年で、どういうことをやり遂げていきたいのか」という業務目標と、「5年経ったら、自分がどうなっているのか」という成長目標の2つを、上司と話し合っ、しっかり定めていただきたいです。

そして、ボトムアップかトップダウンかは別としまして、そういう個人個人の目標が、たとえば組織の目標になり、それが博物館としての目標になりえる。さらにそれが中期計画になるかと思っています。

これから議題3で、50年後の目指す姿という話をされるとと思いますし、先ほども博物館ネットワークの中核という話も出ていましたけれども、では、「北海道博物館は5年後に、どういうスペシャリティを持つのか」、「どういうキャラクターを持つのか」、さらにもっと大事なことは「どんな思想を持つのか」を、まずはしっかり定めて、個人個人の目標と整合していく。これは計画として、当たり前の作り方ですが、まだ時間はありますから、それをぜひ貫徹していただくようにお願いします。

大原会長：ありがとうございました。それではお時間もございますので、次に進めさせていただきます。

議題（3）報告事項3 ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想

大原会長：報告事項3「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」について、事務局からご説明をお願いいたします。

右代学芸主幹：環境生活部文化局文化振興課 高見課長からご報告させていただきます。

高見課長：文化振興課長の高見でございます。

〈以下、資料3に基づき、「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」（以下、「構想」）について説明）

大原会長：ありがとうございました。それではただ今の報告に対して、ご意見・ご質問、何かございましたら、お願いいたします。前回の協議会での皆様のご意見も参考資料としてお手元にあります。反映されている部分もない部分もあると思いますけれども、それも踏まえて、何かございますか。

《意見1》「構想」全体について（1）

右代学芸主幹：湯浅委員が欠席だということで、報告事項3についてのご意見を事前にいただいております。事務局から、ご報告いたします。

「構想のラフな前段階の資料のように受け止めました。構想の実現に向けて具体的にいつ何をするのかといった計画を今後示していく必要があることだけ指摘しておきます」以上です。

《意見2》アイヌ民族との関わりと歴史観について（1）

澤田副会長：現在、北海道150年ということですが、100年のときは、はっきり言って、アイヌ民族はたぶん意識されていなかったと思います。その後、平成20年には国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されました。そして、その前の年には、国連総会で世界の先住民族の権利が認められています。日本政府もそれを認めて、今に至っていますから、アイヌははっきり国に認められてきています。「アイヌ支援新法」ではアイヌが「先住民族」と明記され、これから国会審議ですが、おそらく可決されると思います。そのような時代ですけれども、今は「150年」であって、これから「200年」に向けての50年を考えたら、名称は「開拓の村」でいいのでしょうか。そして道民としてのアイヌなので、開拓の村に「アイヌの復元家屋」があってもいいと思います。百年記念塔は、今、壊す方向ですから、その後のモニュメントには、やはりアイヌと和人の「共生」と言いますか、そういう形を取ってもらったら、まだ道民の理解は進むかと思います。この「構想」についてですが、アイヌ民族文化研究センターはありますが、それは博物館の中に入ってみなければわからないし、外見から見ても、アイヌとの関わりなど、一切ありません。そのあたりをもう少し考慮してほしいです。これから200年、250年に向けて、「開拓の村」という名前のままでは、少し進歩がないように思います。

大原会長：私もまったく同感です。前回の協議会でも意見がありましたけれども、「開拓記念館」から「北海道博物館」に名称が変わったことで、歴史観が変わったと思います。百年記念塔も、開拓の村もそうだと思いますので、ぜひ名称を変えるという議論の方向があれば

いいと思います。

高見課長：資料3の2ページ目に書かせていただきましたが、「北海道には、世界遺産登録をめざす縄文遺跡群をはじめとする歴史的な文化や、先住民族であるアイヌの人たちによって培われてきた文化が存在します。さらに、全国各地からの移住者の生活や明治期における諸外国の影響を受け継ぎ」、その上に今の北海道があるという認識に、我々としては立っております。百年記念塔につきましては、先ほどモニュメントのイメージをご説明いたしましたけれども、澤田副会長からもお話がありましたようなお考えも、当然取り入れた形でやっていきたいと思っております。一方で、いろいろご意見が分かれるところですが、北海道博物館だけをご覧になって「開拓記念館時代から開拓の歴史が少なくなった」と批判される方もいらっしゃいます。一方で、「開拓の村には、まったくアイヌの話がないから、おかしいのではないか」というお話も伺います。けれども、道としては、「このエリア全体が博物館」と認識しております。開拓の村は、もともと、明治から昭和初期の建物の移築がコンセプトですので、名称の問題はありますが、あのような形で納得していただきたいです。アイヌ民族の復元家屋に関しましては、確かに北海道博物館の中にはありますので、ご覧になっていただけますけれども、開拓の村にもアイヌ民族の復元家屋も作ってほしいという話もありますので、そのようなことも今後、考えていかなければならないとも思っております。けれども、NHKの150年の特集番組が昨年、アイヌの方の苦難の歴史を含めた回と、開拓の苦労をされた人たちの回の2回に分けて放送されていましたが、同様に私どもとしては、やはり、どちらもあって初めて北海道の歴史だと強く思います。バランスも配慮していかなければなりませんけれども、開拓の歴史も、消すことはできない歴史で、子どもたちにも、そこをしっかりと伝えていかなければいけないと私は思っております。当然、北海道博物館のアイヌ展示は、日本一といいますか、世界に誇れるアイヌ展示だと私も受け止めております。ちょうど1年前ですけど、文部科学省のヒアリングで呼ばれたときも、「北海道博物館はリニューアルしてすごく良くなった」と、大変な高評価をいただいていることが、私は自慢でございました。ですので、博物館か村か、どこか1か所だけを見ると、確かに少しアンバランスでしょうけれども、私は、両方見ていただいて初めて、北海道の歴史の今の立ち位置が見えてくると思います。当然、開拓の村の名称の件や、「アイヌ民族の復元家屋」の設置などの問題は、ヒアリングでも、いろいろ伺っています。私どもとしても、意見として容れさせていただきまして、今後、検討していきたいと思っております。やはりアイヌの方の歩んでこられた様々な苦難の歴史の部分、それから開拓の部分も、両方をきちんと伝えていくことが必要で、それが北海道博物館や我々の役割だと認識しております。

《意見3》「構想」におけるコンセプト・理念の不在について（1）

竹垣委員：ひとつは、この「構想の概要」です。この中で本来書かなければいけないのは「つながりあう。私たちの北海道ストーリー」ではなくて、「北海道としてどのようなストーリーを伝えたいか」という、基本的な骨格です。けれど、この「概要」には、ストーリーの中

身を何にも書いていません。読み終わっても、結局「百年記念塔は古くなったから潰しましょう」というようなことしか書いていません。開拓のことやアイヌ民族のことを、どのように語りたいか、さっぱり何もわかりません。書いてあるのは、「みんなが共有できるストーリーを作りましょう」だけです。そんなことは、子どもでも書きます。これを読み終わった後、当然のように、「開拓の村は、こう名付けなければいけない」や、「誰が見ても、百年記念塔はこうあるべきだ」ということがわからないのなら、「これは無駄な紙」としか言いようがないと思います。

《意見4》北海道博物館の全体像について

竹垣委員：この「構想」では、「もっと博物館そのものについて語っていただきたい」ということを、ぜひお願いしたいです。博物館に関して、どうしても近々、答えを出していただきたいことは、ふたつです。

ひとつは、このリニューアルした博物館の成り立ちに関わります。旧来的な総花で博物館をまとめようとしていたところに石森館長が来て、「今の博物館のモノの見方は変わってきているのだ」ということで、通史型展示から一気に「テーマ別」に変えられたのですが、ただ一気すぎて不十分な気持ちは否めず、石森館長が一番忸怩たる思いをお持ちだと思えます。そこで、「次の50年」に耐えうる新しいテーマをもう1回、再構築するべきだと思います。それに対して、博物館そのものの全体像を変えていくのかどうか。これをぜひ、議論していただきたいです。

ふたつめは、アイヌ民族文化研究センターです。これは、どうするおつもりでしょうか。「構想」には、「国立アイヌ民族博物館と連携を図る」と書いてあります。それは当然だと思います。けれど、常識で考えて、「家に表札を2つ貼っているような家と付き合いたい」という家はありません。そういうことに対して、どう思っているのか、ぜひ聞きたいです。今日は答えは出ないのかもしれませんが、そういうことを、この「構想」の中に盛り込んでこそ、「次の50年」に耐えうると思います。「構想」を読んで、「北海道博物館はすごい」、「そこを言い切るのか」、「ビジョンをそこまで指し示してくれるのか」と、尊敬される博物館になるべきだ、と提言いたします。

《意見5》「構想」におけるコンセプト・理念の不在について（2）

大原会長：この野幌森林公園エリアは、百年記念塔はシンボルなので除外しますと、開拓の村も北海道博物館も、同じ博物館で、その他は森だと思います。そうすると、森はきちんと管理して、自然のままにしておいていただければいいので、あとは「博物館をどうするか」がとても大切です。もしここを「北海道のスミソニアン」にするのであれば、新しい収蔵庫を造るなど、様々なことが出て来ますが、アカデミックなエリアにするのか、といった、「このエリアはどうしたい」ということが読めませんでした。ですから、50年後、森は残してもらいたいですが、「ここはどうなっているのか」ということが、わかりませんでした。実

はそれが素直な印象です。ですので、本当に「博物館を中心とした、アカデミックなエリアにしたい」ということがわかると、この博物館がどんどん生きてくると思います。それはまさに、竹垣委員が仰ったように「博物館をどうするか」という話です。

佐々木委員：先ほど竹垣委員が仰ったように、基本的なコンセプトがこの「構想」にはないので、道として、北海道博物館・開拓の村等を含めたこのエリアを、将来、どういうコンセプトを持って、どういう形で作りたいのかが見えません。それが大きな問題として残っています。けれど、それは2年や3年の議論でそう簡単に答えが出てくる問題ではないので、これは常に念頭に置いて議論をし続けていかなければいけないと思います。ただ、この資料3に、そういった理念を議論した痕跡が見られないところが少し問題です。そして、国の「民族共生象徴空間」とどう棲み分けるかは、こうした「民族共生象徴空間」の理念と、北海道がこれから森林公園エリアをどうしていくかということが、非常に大きな問題として関わってきます。国の「民族共生象徴空間」は、アイヌ文化の復興と新しい創造が基本的な理念です。つまり、50年などとは言わないで、100年、200年、1000年……と、アイヌ文化をさらに発展させていくための拠点にしていきたいということで、アイヌ文化もしくは先住民族文化に特化した形で作られています。ですが、この野幌森林公園は、そこまでやる必要はない。「北海道」の予算ですから、北海道の復興とは言いませんけれども、北海道の新たな創造の拠点として再構築していくということが、棲み分けのひとつの大きなポイントになると思います。

《意見6》アイヌ民族との関わりと歴史観について（2）

佐々木委員：北海道には当然、先住民族のアイヌがいるわけです。しかもアイヌの人たちが、明治以降、消えたわけではないです。「開拓の村」と称してしまして、基本的には明治以降に北海道に建てられた建物類を移築してきて、できるだけオリジナルなものを再建するというものですから、作ったものではなくて、オリジナルの素材を使って、とにかく移築してくるというのが基本なのでしょう。けれど、アイヌ協会の理事長と、よく話していますが、北海道の開拓や北海道の開発にアイヌ民族が果たした役割が、今まで少し過小評価されすぎています。「アイヌの人たちは、狩猟して漁猟して、ただその権利を奪われていっている」ではなく、たとえば、馬の飼育が始まれば、積極的に自ら牧場を経営して競走馬を育成した人たちもいますし、あるいは道路建設が始まれば、測量士として活躍した人たちもいます。明治の時代の中で、いろいろな新しい分野にアイヌの人たちも進出して活躍しています。そういう人たちも、「北海道の開拓」あるいは「北海道の開発」に大きな貢献をしているわけです。そして、開拓の村にある建物は明治から昭和初期という開拓時代の建物だとすれば、場合によっては、「明治時代のアイヌの家屋」、「明治時代のアイヌの何らかの施設」、「明治時代のアイヌが使った農機具や牧場に関する道具」などを展示することも、開拓史のひとつの在り方ではないかといった発想も必要だと、私は最近思っています。

ただ、この話は、私のオリジナルではなくて、実はもう30年くらい前に、あるシンポジ

ウムで河野本道さんが「なぜそういうものを博物館で展示しないんだ」と主張されたことがありました。今考えてみますと、北海道の歴史やアイヌの歴史を考えるとしたら、そのあたりも見逃してはいけないと最近は思っております。実は、この構想は国立アイヌ民族博物館で展示しようと思っっているのですが、とてもではありませんけれど、国立博物館では、館内に建物を造るスペースがありませんから、博物館の中でできることをやろうと考えています。

《意見7》博物館と公園地域全体との関係性について

佐々木委員：石森館長も私も、ずっと博物館という組織にいましたけれども、どうしても、博物館は「建物の中の世界」と思ってしまいます。けれど、我々のやっていることは、建物の中では収まりません。フィールドに行って調査していることもありますけれども、フィールドで「これはぜひ博物館で再現しよう」と思うものには、博物館のハコに収まらないものがたくさんあります。では、そういうときにどうすればいいかという、「フィールドミュージアム」、すなわち野外博物館になります。そして、国立アイヌ民族博物館は、「象徴空間」という公園エリア全体を博物館にしてしまう「フィールドミュージアム」というコンセプトです。残念ながら、国立アイヌ民族博物館の場合は、文化庁と国交省との縦割り行政があるので、連携がなかなかうまくいなくて悩んでいますが、北海道の野幌森林公園の場合も、「一体的にやれ」とは言いませんが、「開拓の村だ」「博物館だ」と言っていないで、お互いに協力し合っ、博物館でできないことは、開拓の村で実現してもいいですし、開拓の村でできないことは、博物館で実現する形で、かなり踏み込んだ連携をしていけばいいのではないのでしょうか。そして、開拓の村だけではなく、公園全体で実現できたらいいのではないか。つまり、北海道博物館には、自然の展示もあります。そこで、「ここで見られるものの実物はこっちにありますよ」や、「この実物は遠くて見られないのが、詳しく見たければ博物館に来ればありますよ」など、いろいろな連携ができると思います。新しい構想のもとに、新しいやり方で、館全体が進んでいくといいと思います。

《意見8》「構想」策定に至る過程について

宇佐美委員：皆様が仰っくださいましたが、前回の協議会でも、アイヌ民族との関係や、「開拓の村」で名称はいいのかなど、いろいろな議論も出ていましたので、今、竹垣委員や佐々木委員が仰っことに尽きると思います。

こういうときの物事の決め方についてですが、環境生活部が「北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会」も作っ、5回も会議をし、いろいろなヒアリングをし、調査もして、「道庁としてもやることをやっ」「皆さんからも意見を聞いた」結果がこれだということですが、前回も申し上げたとおり、そういうときに、私たち博物館協議会としては、今のように、いろいろな意見が出るわけですが、けれど、「構想」をまとめる途中で一度も聞かれません。それなのに、別組織の懇談会が議論をしている。こういう決め方は、他のテー

マでも、よく見られると思います。懇談会もこれだけ開いているのですから、一生懸命やっているのはよくわかりますけれども、既存の協議会などの意見をもう少し吸い上げながら骨太の議論を進めるという方法を、ぜひやっていってほしいです。この懇談会に集まられた方も、一生懸命議論をして、まとめられたのだと思います。けれども、先ほど、竹垣委員も仰ったように、「構想」の概要をみただけでは、理念はわかりません。誰もわからないと思いますが、これは懇談会で5回も話し合った結果ですよ。こういう既存の会議を使わない決め方は、時間とエネルギーの無駄になりがちなので、新設の懇談会だけで決めないで、私たちや皆さんの意見も取り入れて活かせるような仕組み作りを、道庁には、ぜひしていただきたいです。

前回の協議会でも中間報告を受けました。そのときに私は「私たちは、何をどの程度、言えばいいのでしょうか」と発言しました。今もそうですが、私たちにとっては「何をどの程度、言えばいいのか」、戸惑います。この「構想」をもとに、また議論が進むのかもしれませんが、その場合は、ぜひ私たちの意見なども取り入れていただき、私たちだけではなく様々な意見が、現実的なものになるように、せつかくの意見を活かすような、構成力のあるやり方をお願いしたいです。

高見課長：昨年6月の協議会で、1回ご説明させていただき意見を伺いました。ですが、その1回しか機会がなく、その後、9月に「素案」や「案」など、各段階がございましたも、博物館協議会にはその後何もないまま今日が報告ですので、そこはご指摘のとおり、真摯に受け止め、申し訳ございませんでしたと素直にお詫びしなければいけないと思います。

幅広い構想ですので、「どこの部分で、何を言えばいいか」ということは、確かに難しいと思います。ただ、先ほども湯浅委員からコメントがありましたけれども、これはあくまで「構想」でございます。このあとの「肉付け」の部分につきましては、博物館にしましては、第1期中期計画期の反省のうえに立って、次の中長期の計画をしっかりと作っていかねばいけないですし、開拓の村にしましては、「活用するのはわかったけれど、具体的にどういうイメージでやっていくのか」というところは、各論として、しっかりとやっていかねばいけません。そこは今回、ご指摘もありましたので、ポイントポイントで文章でご照会するなど、その都度、丁寧に博物館協議会にもお話を伺いたいと思っております。皆様はまさに、北海道博物館の一番根幹にかかわる部分に関してご審議いただく会の委員でございますので、特に博物館を「今後どうしていくか」に関しては、皆様方の一番大事な役割だと思います。ですので、特に、次の中期計画の策定にあたっては、皆様方から、具体的なご提案を今のうちから、どんどんと事務局にお寄せいただいたほうがよろしいかと、私どもも思っております。

《意見9》「構想」におけるコンセプト・理念の不在について（3）

竹垣委員：「書きにくい気持ちだけが痛いほど伝わってくる」というのが、この「構想」の概要を見た感想です。私もサラリーマンですから気持ちはわかります。けれど、ここ最近、

世の中は、ずいぶん変わってきていると思います。たとえば、法律に基づく環境、遺伝子工学に基づく最新の研究、そして、佐々木委員が言われたように、博物館に関わるモノの考え方も「激変」と言えるほど変わってきています。もともと「北海道」は、開拓の時代から積極的なビジョンを提示してきたところですので、批判にさらされてもいいから「こうあるべきだ」みたいなものを、ぜひ提示していただければいいと思います。

《意見10》博物館施設の活用について

竹垣委員：それから「希望」を、もうひとつ。これだけの森がある空間なので、展示物などを置くことも大事ですけれども、その結果として、できれば「ライフスタイルを体験できる」場所にできないかと思います。たとえば、「移動の不便さを体験する」、「その建物にいることのつらさや、開拓時代の不便さを体験する」など、北海道におけるそういうライフスタイルを逆に体験できる。そして、何よりも、アイヌの暮らしを理解できて、その精神世界の一端まで、少し理解できるというものです。もしそういう施設ができれば、これは世界水準を超える博物館になりえると思います。これはぜひ、議論していただきたいです。よろしくお願いたします。

大原会長：他によろしいでしょうか。ただ今ありましたご意見につきまして、関係部局で検討して、今後の事業に反映していただくように、よろしくお願申し上げます。

議題（4） 報告事項4 平成31年度北海道立総合博物館協議会スケジュール

大原会長：報告事項4「平成31年度北海道立総合博物館協議会のスケジュール」について、事務局から説明をお願いします。

右代学芸主幹：スケジュールについてご報告させていただきます。

〈以下、資料4に基づいて、北海道立総合博物館協議会のスケジュールについて説明〉

大原会長：ただ今のご説明に、何かご質問等ございますか。よろしいでしょうか。

4 その他

大原会長：次第4「その他」ですが、皆様から何かございますか。特にございませんか。

委員：はい。

5 閉会

大原会長：それでは、皆様、長時間にわたり、ありがとうございました。これをもって、本日の議事は終了となります。お疲れさまでした。

事務局：ありがとうございました。